

Title	個人内過程からみた社会化の理論
Author(s)	牧野, 紀之
Citation	大阪大学教育学年報. 1997, 2, p. 121-130
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4309
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

個人内過程からみた社会化の理論

牧野 紀之

【要旨】

社会化という概念はかつて、個人と社会との関係を論じる上で重要なものとして注目されていた。しかしやがてそれは、人間の主体性や創造性を含み、社会の変動性や多様性を説明することを求められた。本稿では社会化の過程の中に自己を導入することでこの問題にアプローチする。私の述べる自己はG.H.ミードの自我論に従ったものである。この見方は社会規範の学習や二次的社会化または再社会化の問題、社会の革新についてより適切なパースペクティブを提供する。

本稿ではさらに、この見方が仮定している自己の一つの傾向について扱う。それは一種の熟達や有能さに向かう傾向であり、R.B.ホワイトによって「効力性」として扱われたものである。しかしそれはより認知的に、さらに人格的な特性の面から考察される必要がある。M.E.P.セリグマンの「説明スタイル」の概念はこれに示唆を与えてくれるが、その獲得の過程についての知識は未だ不十分であり、研究の必要性を残している。この点において本稿は社会化の完全な理論に到達しているわけではないが、われわれが次になすべきことを示すものと言えるだろう。

1. はじめに

「社会化」という概念が一時期ほど盛んに論じられなくなってからずいぶんと経つ。「社会化」は個人と社会との関係を説明するための概念であって、1950年代から60年代にかけては社会の基本的な機能要件として社会化をとらえた研究が多くなされた。それらは社会に個人を社会化する機能があると前提した上で、この過程によって個人が社会的な行動をするようになるために、社会は維持存続していくのだ、という考えに立っていた。しかしその後、こうした見方は人間を全体的に理解する上で不十分なものであるという批判がなされるようになり、社会化論自体も次第に勢いを失っていった。

批判の焦点とされたのはそのモデルの静態性であり、それが基づいている決定論的な人間観、固定的で一元的な社会観である。モデルの持つこのような特徴のために、それは社会の変動をうまく説明できず、また多様性を特徴とする現代社会に適用するのにふさわしくないといった指摘がなされた。またそれは個人の可塑性を扱えず、また主体性や創造性のような革新の力を説明することができなかったので、人間のそのような部分を重視する「人間主義的な」論者にも好まれなかった。そこで変動・多元的社会において適切であるような、人間の主体性や創造性を扱える社会化理論の構築が目指された(青井 1976、麻生・柴野 1978、柴野 1976,1977、渡辺 1989,1992、Wrong 1961)。しかし議論は適切な個人内過程についての理論の必要性の指摘にとどまり、それがどのようなものであるのかにまでは至っていなかったように思える。

こうした過程をふまえ、ここでは社会化過程の中に積極的に「自己」への視点を導入することで社会化における個人内過程に対してアプローチしていこうと思う。社会化は一種の学習であるという見解は一般に認められるものであると思うが、学習は自己の変化としてとらえられる。ま

た後に詳しく考察するが、自己は個々人に特有なものとして働くが同時に本来的に社会的なものである。それは規制的な側面と革新的な力を同時に含み、自己を媒介とすることによって個人の主体性や創造性を社会化過程の中に位置づけることも可能になってくるように思われる。

個人の主体性や創造性を社会化の過程の中に位置づけようとするのは、それらが重要であると思うからに他ならないが、ここで断っておかなければいけないのは、これが重要であるというのは人間が主体的や創造的であることが本質的に大事なことであるという理由からではない。また人間が本来的に自由で、社会に拘束されない存在であるということを主張しようと思っているわけでもない⁽¹⁾。私の目指すのはあくまでも現象の適切な理解であり、そのためには人間の主体的に行為するという側面に注目することが有効であり、それによって社会化過程のダイナミクスがより適切に理解できると考えるためである。

また、結果としてかなりミクロなレベルを論じることになるが、これは社会化過程を個人の個別な学習の一つに解消してしまうことを目指しているのではない。社会化という問題視角の意味は個人と社会との接合を説明するところこそあると考えるが、そのためにはこのようなミクロなレベルから始めてマクロなレベルへと移行していく必要があると考えるためである。もちろんマクロなレベルから始めることも可能だろうが、現在のように変動・多元的社会としての特徴を強めている社会は一つの実体としてとらえることがより困難であり、マクロなレベルからミクロなレベルへの方向への移行はより困難であると思われる。そのためにここではまず非常にミクロなレベルでの学習過程に焦点を当てるのである。

ここでは社会化を社会的な他者との相互作用によって生じる自己の変化の過程であるととらえる。そしてその中でも社会化の個人内過程である自己の変化に注目して論じていくが、それには自己をどのようなものとするかから始めていく必要があるだろう。そこで以下ではG.H.ミードの自我論⁽²⁾から、自己とは何か、それはどのように発達するのかを考察していくことにする。

2. G.H.ミードの自我論

ミード (Mead 1934, 訳書1995) において呈示されている自己は有機体⁽³⁾の(主体的な)行為に基づくものであるが、(その発生の起源や発達の契機として社会に依存するという意味で)きわめて社会的である。またそれは何らかの実体というよりはむしろ動的な過程である。そしてそれは個人の中に独立して存在するものではなく、行為によって社会を常に反映していく。

ミードの呈示する自己の特徴の第一は、それが行為によって生じるという点である。つまり、自己は行為に先立つものではなく、先行するのは行為なのである。ミードにとって自己は必ずしも行為の始発点ではなく、むしろそれは行為によって生じる。ただし自己は行為の単なる後づけとしてのみ存在するのではなく、内省的な過程を経て行為をうみ出すものでもある。行為が自己に先立つというのは、自己は生まれたときからあるわけではないということ、行為は有機体に自己が備わる以前にも可能であり、その行為(特に社会的な行為)の過程のなかで自己が発生し、またそれによって発展していくという見方を表している。このことは自己の発生以前の行為を考えることでより明らかになるだろう。例えばカーテンの隙間から射し込む光のまぶしさに目を閉

じ、赤ん坊が空腹のために泣く。このような行為は反射的で、自己が介在しない行為である。もしかしたらこのとき赤ん坊は泣くという行為が母親にある反応を呼び起こす（自分に乳を与える）ということを知っているのかもしれない。だがいずれにしてもこのときには行為は刺激に対して行われているのみであって、意味に対して行為することもないし、自分と世界に対する認識もない。しかしこのような、自己の介在なしに行われた行為がもたらす意味に気付くと、やがて自分に対して向けられた行為が（自分にある一定の反応を引き起こすという）意味を持っていること、そうした意味ある行為を自分に対して行う他者がいることに気付く。すると有機体は行為そのものではなく、意味に対して反応し、意味に基づいて行為するようになる。この、行為の意味への結びつきを与えるのが自己の働きであり、このことによって自己は行為に働きかける。

特徴の第二は、自己は過程としてとらえられるということである。過程としての自己をとらえるのに重要なのは「I」と「me」という、自己の二つの局面である。行為とそれに対する他者の反応は（行為が自分自身に対しても指示をするという過程を経て）、有機体内部に一般的な他者を構成し、自分と他者についての認識を形作る。この、有機体の内部に輸入された自己の部分が「me」である。しかし自己は同時にそれに対して働きかけていく部分も持ち合わせている。この主体としての、あるいは行為する自己の部分が「I」である。「I」が「me」に働きかけることで自己は機能する。自己は本質的に認知の過程であるが、この過程を形作るのは「I」と「me」という自己の二つの局面の会話⁽⁴⁾である。

特徴の第三としてあげられるのは自己の社会性である。自己は社会に起源を持ち、常にその様相を反映していく。この特徴は第一、第二の特徴から導き出されるものでもあるが、有機体は社会に対して行為していくことで社会に接近し、自己が生じる。発生した自己は社会に対して行為するための認知の過程であり、自己が発生してから以後の行為とそれへの反応は再び自己に取り込まれ、自分と世界の関わりについての認識を修正していく。このように、自己は個人に属するものではあるが、社会とは切り離せないものである。

このようなものとして考えられる自己の発達・変化の過程として社会化をとらえることにより、社会規範を学習していく過程や、二次的社会化や再社会化に関わる問題、社会を革新する力の問題などについてより適切な解釈を提供できると思われる。

まず、自己は行為によって常に更新されていく可能性を持っているが、その変化は全く白紙の状態から起こるのではなく以前から継承しているものをもとにしてなされる。受け継がれてきた自己は現在の具体的な経験と等価ではなく、ある程度の普遍性や抽象性を備えたものである。そのため新しい経験が直ちに自己をあるいはその一部分を入れ替えることはなく、むしろ自己がその自律的な機能として新しい経験を飲み込み、それを自らの一部とするように自らを変形する。この意味で自己の変化は多少なりとも全体的なものである。そしてそれは従来の社会化論における内面化の概念が示唆しがちな、外部にある何ものかを自らのなかに写し込む過程ではない。時には自己が全く別のものに置き換わってしまったかのような劇的な変化が生じることがあるが、その際にも古い自己は全く捨て去られてしまうわけではない。ただしその場合には、新しい経験を位置づけるには古い自己はもはや全く適していないので、抽象性のレベルをあげることで古い自己と新しい経験とをともに含むような自己を新しく作り上げるのである。

自己の変化のこのような特徴についてはL.コールバーグ (Kohlberg 1980, 訳書1987) が道徳性の

発達の文脈でより明確に論じている。コールバーグによれば道徳性の発達とは道徳的判断の様式の変化によって道徳性が他律的なものから自律的なものへと変化していくことである。この様式の変化はかつての様式を否定することによってではなく、かつての判断の仕方を相対化し、より広い見地からみることによってなされる。広い見地からみるとは、抽象的な思考を用いるということである。このとき自己は今まで慣れ親しんできた判断の方法とそれでは対処の難しい道徳的葛藤を同時に（矛盾なく）含むように、全体的、構造的な変化をする。

自己のこのような特徴は二次的社会化または再社会化の可能性と、一次的社会化の影響力の強さを同時に示唆する⁽⁵⁾。二次的社会化や再社会化は一般に、一次的社会化に比べてより表面的で部分的なものであることが多いが、それは加齢に伴う生理的または脳神経的な柔軟性の低下のような要因よりも、自己の変化がそれまでの自己を基本にしてのものであるということによってより適切に説明されると思われる。時には「洗脳」と呼ばれるような激しい再社会化が起こることがあるが、その場合でも、以前の自己は捨てられたのではなく別の見方をされるものとして、依然自己の一部になっているのである。

また自己の発生と発達は社会的相互行為を効率化し、より多様で複雑な相互作用を可能にする方向へと向かうものであると考えられる。そして発達した自己によって与えられるこのような相互作用の能力は現代のような高度に制度化された社会を維持存続させる力でもある。そしてモードによれば社会自体も抽象性と複雑性を増す方向に進化しており、発達した自己は社会を単に維持するだけのものを越えてその進化を押し進める原動力でもあるのである。

3. 自己の発達の基礎

これまでのところで、自己は社会的相互作用を効率的なものし、またそれは自己が発達することによってより促進されると述べてきた。こうした考え方の背後には、自己が本質的にある一定の方向に自らを拡大・組織化していく傾向を持っていることを仮定している。それは一種の熟達を求めるものであり、情報の処理の効率性を高め、対応できる世界を広げ、環境との相互作用における自己の原因性を拡大していく傾向である。この傾向は一つの動機を形成し、この動機を仮定しなければ自己が生じたり、自己自身が構造化されていったりする理由を説明することはできない。

R.B.ホワイト (White 1959,1963,訳書1985) はこうした自己に属すると思われる傾向を「効力性 (effectance)」と呼んだ。これが自己に属する (ホワイトの表現では「自我装置に固有の」) というのは、こうした傾向 (欲求) が身体や、生理的欲求とは独立したものと考えられるからである。ホワイトはこの「効力性」が人間 (に限られないが) に本質的な動機を形成しているとしたが、こうした動機 (「イフェクタンス動機づけ (effectance motivation)») は身体的・生理的欲求に基づくものとは次の点で対照的であるといえる。

身体的・生理的欲求に基づく動機は基本的にある種の欠乏に基づき、その欠乏を補う方向に有機体を動機づける。そしてその欠乏が満たされることによって動機づけは低下し、行為は終了する。それに対して「効力性」に基づく動機づけは不足よりもむしろ、ある程度満たされた状態で生起し、そのものが「効力感 (efficacyまたはfeeling of efficacy)」をもたらすような行為に従事する。

「効力感」とは効力性に関する満足感であり、「何かをしているという感じ、活動的ないしは効果的であるという感じ、何かに影響を及ぼしているという感じ」(White 1963, 訳書1985: 48頁)である。そして活動の結果の「効力感」は当初の動機づけのレベルを低下させるよりはむしろ上昇させ、身体的・生理的欲求などに基づくもっと強力な動機に打ち負かされるか、その活動がもはや新奇なものとして感じられなくなることにより「効力感」を与えなくなるかすることによって行為は終了する。前者の動機に基づく活動としてもっともわかりやすいのは、例えば空腹時の食欲に基づく摂食行動や痛みや苦痛を感じる状況からの回避行動のような、生理的でしばしば反射的な行為であり、後者の動機に基づく活動の例としては「遊び」をあげることができるだろう。「遊び」は結果として学習をもたらすことはあるが、活動に従事している当の行為主体の目的はそこにはなく、「遊び」という活動そのものにある。「遊び」は何か(不足しているもの)を獲得するためになされるのではなく、ただ遊びたいから、その「遊び」という活動そのものが快を与えてくれるためになされるのである。そしてその活動が終了するのは例えばトイレに行きたくなったり、親に叱られたり、「遊んでばかりいてはいけない」と思ったり(より強力な動機の出現)することや、もうその遊びに飽きてしまう(活動が「効力感」を与えなくなる)ことによって終了する。

「効力性」は人間だけが持っているわけではなく、動物の場合にも「効力性」に動機づけられていると思われる行動が観察されることがある。しかしこの「効力性」に基づく動機やそれによって従事される活動は人間においてより出現の頻度が高く、多様で、また時には身体的・生理的欲求を打ち負かすときさえある。この意味で「効力性」によって動機づけられた活動は人間においてより顕著なものであり、特徴的なものであるといえる。

「効力性」は自己に本質的に備わっている傾向であるのでそれについての差異を論じることはあまり妥当なことだとは思われない。しかしそうした傾向の結果、どれだけ内発的な動機に基づいて行動に従事するか、またはどのくらい「効力感」を経験することができるかという程度に関しては個人によって差があると考えられることができるだろう。もちろんこの差は、与えられた環境や機会の差である部分もあるが(特に人生のより初期の段階ではそうであろう)、より本質的には人格的な要素の問題であると考えられることができる。ホワイトはこの問題に関して「コンピテンス(competence)」という概念を用いて説明を加えている。

「コンピテンス」とは「効力性」の人格的な側面であり、行為主体の一般的な能力を指すものである。それは「効力感」の経験が人格の中に蓄積されたものであり、いわば「効力感」の歴史である。歴史という言い方をするのはそれが単なる「効力感」の総和以上のものであるからである。いずれにせよ「コンピテンス」は行為主体の(行為する主体としての)一般的な能力を表しているが、この「コンピテンス」はその行為主体によって主観的に評価されることで、行動に影響を及ぼしていく。この主観的に評価された「コンピテンス」は自信や自尊心の根拠となり、意欲的であるとか、活動的であるとかいう特性を与えるものである。人間は自分にどれだけの「コンピテンス」があると感じるかによって「効力感」を得られるような創造的な行為に従事したり、あるいはただ生理的な必要性に迫られた行為を遂行するだけに止まったりする。つまり、先述してきたような傾向の強さ(あるいは顕著さ)は「コンピテンス」の発達の度合いによって与えられるのである。

ではこの「コンピテンス」はどのように発展していくのか。この点についてのホワイトの説明はそれほど十分なものではない。その説明を要約すれば、「効力感」を経験することで「コンピテンス」が発達し、それによって人は主体的あるいは意欲的に行動し、そしてそうした行動がまた「効力感」を経験する機会を提供し、また「コンピテンス」を発展させていくというものである。つまり一度「効力感」を豊富に経験する機会に恵まれたものはますます順調に「コンピテンス」を発達させていく人生を約束されるということを意味している。もし「コンピテンス」の発達についての説明がここにとどまってしまうならば、それは結局幼児期の経験が一生を通じて決定的な役割を果たし続けるということになり、彼の批判したフロイト流の精神分析理論と同じ人間観に行き着いてしまう。

しかし、「コンピテンス」の発達の過程はもう少し複雑なものであろうと考えさせるような実験の結果がE.L.デシ (Deci 1975, 訳書1980) によって示されている。

デシは学生を対象にして、報酬(言語的強化とお金)が内発的動機付けに対して及ぼす影響を調査した。実験では被験者は課題(パズル)を提示され、それを解くように指示された。全てのパズルを解くのに要した時間はストップウォッチで測定されたが、10分間経過しても解くことができなかつた場合には実験者によって解き方が教えられた。パズルを解いている間、実験群に対しては実験者による正のフィードバック(「大変よろしい」「誰よりも速くできました」などのほめ言葉(言語的強化)やお金)が与えられ、統制群に対しては何も与えられなかつた。そしてその後被験者は一人にされ、自由に振る舞うことのできる時間が与えられた。そしてその時間内に再びパズルに取り組んだ時間によって(パズルを解くことに対する)内発的な動機づけの程度が測定された。(Deci 1972)

この実験の結果で特に興味深いのは言語的強化の動機づけへの効果について、性別による有意な差が見られたことである。男子学生の場合には言語的強化(賞賛の言葉)が内発的動機づけを高める明確な効果を持っていたのに対して、女子学生の場合にはそのような効果は見られず、むしろ言語的強化を受けた女子学生の内発的動機づけはかなり低かつた。この結果についてのデシの結論は、男子学生の場合には言語的強化の情動的側面(自分の有能さについての情報を与えてくれるという側面)が強く認識されたのに対して、女子学生の場合には制御的側面(つまり、外的な報酬としての側面)が強く認識されたというものである。男子学生の場合には言語的強化は自らの有能性についての情報を与えてくれるものであつたのでそれは内発的な動機づけを高め、女子学生の場合にはそれは外的な報酬として受け取られたので因果律の所在に変化を生じさせ(「おもしろいからやる」から「ほめられたいからやる」への変化)、そのために内発的な動機づけを低めたという解釈である。そしてこのような認知の違いが生じた原因として女性が男性よりも依存的であるように教えられて育ってきていることをあげている(Deci 1975, 訳書1980: 162-164頁)。

こうしたデシの説明には二つの重要な要素が入っている。まず一つは「有能さ(competence)」⁽⁶⁾(ホワイトのいうところの「効力感」に類似する概念)の経験を通して内発的な動機づけを高める過程には主体の認知的な過程が存在すること、そしてそのような認知的な過程は文化的なものによって影響を受けているということである。この認知の過程はホワイトにおいては暗示的に示されていなかつたものである。しかしながら、認知という過程は自己にとって本質的なもの

であり、「効力性」が自己に属するものと考えられる以上、この過程を導入するのはより適切なことであるように考えられる。

認知の過程を導入することによって、「コンピテンス」の発達の過程に「効力感」を経験する（偶然の）機会の多少以外の要因を考えることができる。すなわち、ある一定の状況から引き出すことのできる「効力感」の量は固定的なものではなく、認知の過程によって多くの「効力感」が経験されることもあれば、それほどの「効力感」が経験されないこともあるということである。「効力感」を媒介変数として明確に導入しているわけではないが、帰属理論（attribution theory）の立場からなされた動機づけの研究はこうした認知の過程（とその結果としての行為）に焦点を当てたものであると言える⁽⁷⁾。

帰属理論では因果性を何に帰属させるかが問題とされ、帰属の対象とされるもの（運、努力、課題の困難さなど）はそれが内的なものか外的なものか、安定的なものか一時的なものか、あるいは変更可能なものかどうかなどの次元によって分類される。そして期待を増幅させるような帰属をしたときには再びその（種類の）行動に従事することが起こりやすいとされる。すなわち肯定的な結果の場合には、その原因を外的なものよりは内的なものに、一時的なものよりは安定的なものに帰属したとき（例えば自分の能力に帰属したときなど）には次にも同様なよい結果が得られることが期待できるので、再びその行動を行う可能性が高くなる。反対に否定的な結果の場合には、内的なものよりは外的なものに、安定的なものよりは一時的なものに帰属し（例えばたまたま問題が難しかったと考えたときなど）、次に試みたときには違う結果がでることが期待できるようときに、再びその行動を行うと考えられる。この意味で帰属理論は人間を自らの判断に従って合理的な行動をするものであると考えているといえる。とはいえこのことは人間が必ず合理的で正確な判断をするということではなく、その帰属が客観的に見て正しくないことは決して珍しいことではない。帰属理論の立場からなされた研究が示しているのは、人間が客観的に見て正しい因果推論をするかどうかではなく、帰属の仕方が人間の行動についてのより適切な予測を与えるということなのである。

帰属理論は行動の予測にとって重要なのは客観的な状況ではなく、主観的に判断され、解釈された状況であることを示している。これによれば、人が「効力感」を経験して「コンピテンス」を発達させていくことに関しても、「効力感」を経験するために必要なのは客観的な成功という出来事よりもむしろ、そうした出来事を「効力感」へ、そして「コンピテンス」へと結びつけていくような解釈であると言える。

しかし帰属理論は「コンピテンス」の発達の理論を余すところなく補足するものではない。というのもそれは主として状況と行為のレベルに終始するものだからである。帰属理論は認知の様子をモニターし、行動の予測を与えることはできるが、認知の仕方それ自体に対する予測を与えてくれるものではない。「コンピテンス」の発達を考える際には「コンピテンス」の発達に結びつくような（あるいは結びつかないような）認知がどのようにして生じるかということまで視野に入れる必要がある。

この点について「説明スタイル（explanatory style）」という概念を用いた M.E.P.セリグマンの研究はある程度、因果律の推論という認知の過程がどのようにして生じているかという問題に対してアプローチしたものであるといえる。「説明スタイル」とは、習慣として持っている、出来事

の結果と原因を自分自身に対して説明する様式である。そしてそれは帰属理論において用いられていた個人性（個人に内的なものか外的なものか）、永続性（一時的なものか安定的なものか）の二つの次元に加え、普遍性（特定の事柄に関するものか、一般的なものか）の次元を加えた三つの次元で分析される（Seligman 1990, 訳書1994：77-78頁）。最後の普遍性については帰属理論が単一の行為についてのものであったのに対して「説明スタイル」が人格についてのものであるために（つまり、ある出来事他の出来事に対する影響を見るために）導入される必要がある次元であると考えられる。セリグマンはこの三つの次元によって「説明スタイル」の悲観度を測定し、それによってある人のうつ状態へのとらえられやすさを予測し、またこの「説明スタイル」を変えさせようとする戦略によってうつ病の治療を行った。さらにセリグマン（ibid.）はこの「説明スタイル」は、健康な人の意欲や生産性を予測する上でも有効であることを示した。

「説明スタイル」の悲観度は自分の「コンピテンス」に対して脅威を与えるような方法でものごとを認知する傾向であり、楽観度は逆にダメージを最小とし、「コンピテンス」を高めるような方法でものごとを認知する傾向であるといえる。

ただしここでも社会化論の文脈からいえば、帰属理論におけるのと同じような問題が生まれる。つまり、そのように楽観的な（悲観的な）「説明スタイル」を持つのはなぜであるのかという問題である。セリグマンは主な関心が治療であることもあって、「説明スタイル」を変える方法についての考察や実験は行ってもそれがどのようにしてもたらされるかについてはそれほど詳しく考察しているわけではない。唯一それに関係するものとしては子ども時代に身につけた「説明スタイル」は基本的に生涯にわたって維持される傾向を持っている（とはいえそれは変更不可能なものではない）こと、どのような「説明スタイル」を身につけるかについては、子どもにとって重要な大人の「説明スタイル」が深い関連を持っていること、特に母親の「説明スタイル」は子どもの「説明スタイル」にかなりの程度反映されていることを述べているに過ぎない。前述したように個人の意欲や主体性のような要素が社会化の過程にとって重要であり、それが「説明スタイル」によってよく説明されるものであれば自己がどのようにしてそれを確立するのかについてより詳細な考察が必要とされるだろう。

4. 終わりに

この論文では社会化の個人内過程についてより詳細に考察することを通して社会化過程のダイナミクスやその中に位置付くものとして意欲や主体性のようなものに焦点を当てていった。しかしこの考察によって社会化過程が十分に解明されたとはとても言えない。というのも個人が後天的に所有するものについてそれがどのようにしてそこに至るのかという、発達一般を論じる上できわめて始源的な問いが残ってしまったからである。ただ、このことは必ずしも問題が振り出しに戻ってしまったことを意味しない。というのも今や、何に注目してみるべきか、そしてそれはどのようにしてとらえることができるかについて一定の示唆が得られたからである。

注

(1) 社会化の理論の中に主体性や創造性を位置づけるには、それらを自由と決定の問題と切り離しておく必要が

ある。主体性を決定力からの自由によって獲得されるものととらえるならば、主体性は科学的な論議の対象にはなり得ないという点に関して個人的には清水（1947）の意見に賛成である。

- (2) selfを意味するものとしては「自己」が当てられることが普通だが、ミードの邦訳においてはselfを「自我」と訳したものが定着している。そのためにこの論文でもselfの成立についてのミードの考えを「ミードの自我論」という呼び名で指すことにする。
- (3) 「個人」とは人間が自己を備えた姿であると考えられるので、本稿ではそれ以前の行為主体をこう総称する。
- (4) ここで「会話」という語を用いるのは比喩的な意味においてである。というのも「I」と「me」との「会話」は対等な立場で行われるものではなく、常に「I」が「me」に働きかけるという関係であるからである。
- (5) 二次的社会化や再社会化の過程に対する注目の必要性は例えば青木（1976）やBrim（1966）においても指摘されている。しかし最近行われた社会的態度形成についての調査結果（吉川 1996）では、学校教育の諸条件が卒業後数十年経過した現在の社会的態度に対しても影響力を持っていることが示されており、間接的に初期の段階におこなわれた社会化の強固さを示していると考えられる。
- (6) デシは人を内発的に動機づけるものを「有能さと自己決定（competence and self-determination）」の意識と呼んでいるが、理論の骨子はホワイトのものとそれほど違わない。ただしデシは人格的な要素に関心を払うことはほとんどなく、「有能さ」も原文ではcompetenceであってホワイトの「コンピテンス」と同じだが、これは人格的なものというよりは行為によって経験される感覚であり、ホワイトの理論のなかでの「効力感」の方により近いものである。
- (7) 帰属理論の立場に立った研究について、B.ワイナーは以下のようにまとめている。
「第一に、内的あるいは個人的原因と外的あるいは環境的原因とを区別し、そこに特別に配慮することによって行動の因果性の認知が明確になってきた。第二に、先行する情報と認知構造とを因果性の推論に関係づける一般法則が開発されてきた。第三は、因果性の推論が観察された行動の種々の指標と関係づけられてきた。」
(Weiner 1980, 訳書1989: 210-211頁)

引用文献

- 青井和夫.1976.「社会化再考」『教育社会学研究』第31集、5-16頁。
 麻生誠・柴野昌山編.1978.『変革期の人間形成』アカデミア出版会。
 Brim, O. G. Jr. and Wheeler, S. 1966. *Socialization after Childhood: Two Essays*. John Wiley.
 Deci, E.L. 1972. "Intrinsic Motivation, Extrinsic Reinforcement, and Inequity." *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol22, No.1, pp.113-120.
 ——— 1975. *Intrinsic Motivation*. Plenum Press, New York. 安藤延男・石田梅男.1980『内発的動機づけ—実験社会心理学的アプローチ』誠信書房。
 Kohlberg, L. 1980 "Stage and Sequence: The cognitive-developmental approach to socialization." In *Handbook of Socialization. Theory and Research*, edited by D.A.Goslin. Houghton Mifflin Co. 永野重史 監訳 1987.『道徳性の形成—認知発達のアプローチ』新曜社。
 吉川徹.1996.「学校教育の諸条件と青少年の社会的態度形成」『社会学評論』184号、Vol.46, No.4, pp428-42.
 Mead, G.H. 1934 *Mind, Self, & Society: From the standpoint of a social behaviorist*. The University of Chicago Press.
 Seligman, M.E.P. 1990. *Learned Optimism*. Arthur Pine Associates Inc., New York. 山村宜子.1994.『オプティミストはなぜ成功するか』講談社。
 柴野昌山.1976「青年期の教育と社会化」『教育社会学研究』第31集、29-39頁。
 ——— 1977「社会化論の再検討」日本社会学会編『社会学評論』107号19-34頁。
 清水幾太郎.1947「主体性の客観的考察」『哲学』1947年12月冬季号。
 渡辺秀樹.1989「家族の変容と社会化論再考」日本教育社会学会編『教育社会学研究』44集28-49頁。
 ——— 1992「家族と社会化研究の展開」日本教育社会学会編『教育社会学研究』50集49-65頁。
 Weiner, B. 1980. *Human Motivation*. Holt, Rinehart and Winston. 林保・宮本美沙子監訳1989.『ヒューマン・モチベーション

ン—動機づけの心理学—』金子書房.

White, R. B. 1959 "Motivation Reconsidered: The Concept of Competence." , *Psychological Review*, Vol.66, No.5, pp.297-333.

——— 1963. *Ego and Reality in Psychoanalytic Theory: A proposal regarding independent ego energies*

中園正身1985.『自我のエネルギー』新曜社.

Wrong, D. H. 1961 "The Oversocialized Conception of Man in Modern Sociology." , *American Sociological Review*, Vol.26, pp.183-193.

A Theoretical Consideration of Socialization: Focusing on Inner Process of Individuals

Noriyuki MAKINO

The term "socialization" was a key concept in the studies in educational sociology, especially in the 50's and the early 60's. It was regarded as a basic function of society, and was often used to examine the connection between individuals and society. But in the late 60's and the 70's, those studies were challenged in terms of the validity of their conception of man and society. New theories were needed which focused on the subjectivity or creativity of man so as to explain the variability and multiplicity of society.

This paper examines the function of self in the process of socialization. The concept of self I refer to is the Meadian self, which considers self as a process of developing social actions. This view of self and the process of its development offers a more valid perspective to elucidate the process of learning social norms, secondary socialization or re-socialization, and innovations in society.

This view assumes that self has a tendency or a "motivation" to proceed to mastery or effectiveness. R.B.White deals with this tendency, using the term of "effectance", "efficacy", and "competence". Following White, this tendency is activated by "competence", which develops as a history of "efficacy". But this process is cognitive, and is concerned with how to recognize or "attribute" the cause and effect.

In relation to socialization theory, the issue is not what individuals attribute the cause and effect to, but why. M.E.P.Seligman assumes that personality has a tendency of attribution, and he calls this personal trait "explanatory style". This suggests the way to a more precise understanding of the whole process of "competence", but the knowledge about the process through which children acquire an "explanatory style" is not enough.

In this sense, this paper cannot fully discuss the entirety of socialization, but it can at least point out what to investigate next.